

罪のこの機かたのむこの機か

- 今日はどうしても後生の問題の夜明けをさせていただきたいと存じます。どうぞお導きくださいませ。
- △ さあどうぞごゆつくり。
- 先生、私はどうもうれしくなられませぬ。ほんとうの信仰を得られたら、もつとうれしくありがたくなられるものだと思われませんが、どうしてもありがたくなれませぬ。
- △ そんなことは根本問題ではありませんせぬ。末の問題です。なぜそんなことを問います。
- 信仰を得られた皆様をと見ますと、たいへん飲んでいられます。私もあんなになりたいと存じます。
- △ 心の持ち方がちがいます。人まねをしなくてもいいではありませんか。それよりも、あなたはあなたで救われたらいいではありませんか。
- どうぞお導きくださいませ。先生いつたいどうなればいいのですか。
- △ どうかなれますか。
- △ どうにもこうにもなれませぬ。
- △ どうにもこうにもなれない者が、どうなればいいのですかとはおかしいではありませんか。
- でもこのままではいけないと思います。信心も何もない今のままでは。
- △ まだまだだめです。もつともつと真剣で、魂全体をなけ出してくるのです。信仰もそれが人ごとである間はだめです。自分自身の問題にならねば聞いた一切がただの話になるばかりです。
- 私の心では真剣になりたいと思っています。いよいよほつておけないからこそこうして出て来ているのです。どう聞かせていただければいいのです。
- △ み仏様はそのままを救ってくださいさる。
- ではこのまま救ってくださいさると信じてさえいれればいいのですか？
- △ ちがいます。そのままです。
- このままですか？
- △ ちがいます。そのまま来いと呼んでいてくださいませ。
- ではこのまま来いと呼んでいてくださいさると知つたらいいのですか。
- △ ちがいます。
- どうすればいいのです。
- △ どうもするのではありません。ただ聞くのです。
- わかりません。もう私はやめます。私にはとてもみ仏のお慈悲は知れないのでしよう。

- △ ほつてしまいますか。ほつておけるならほつておきなさい。
- 夜もろくろく眠れないのです。ほつてもおけません。困ってしまいます。
- △ そうでしょう。一度この願がおきてきたら、ほつておくわけにはいかなくなるのです。あなたの力でおきたのでもないし、あなたがやめようとしてやめられもしないのです。
- ではどうしてかくまで苦しいことになったのでしょうか。
- △ その願をおこさせたのはみ仏です。み仏の心が私たちの魂の内にとどいてくださる第一歩のあらわれは、この迷いをはなれて仏になりたいという願となって表われてきます。み仏のなさしめたもうことですから、あなたの力ではどうにもできないのです。
- わかりました。私は私の心でおきた願いかと思っていました。み仏様が私をお救いくださるために、おどろかない私にこのおどろきをたたせてくださったのですか。
- △ 救つてやりたいとの仏の度衆生心があなたの魂の底から動き出てくださいなのです。そのみ仏のお力であなたは救われるのです。
- どうすればいいのですか。
- △ 仏の招喚の勅命を、み救いの叫びを聞くのです。
- 仏の叫びとは何ですか。
- △ 南無阿弥陀仏です。名号は仏の名のりであり、叫びであり、招喚の勅命です。み仏の絶対なる大願業力は、あなたをお浄土までつれて行かねばおきませぬ。
- つれてゆかねばおかぬのですか。
- △ そうです。あなたの持つ喜怒哀楽等の人間心に関係なく、あなたを金剛力をもつてお浄土につれてゆきます。それが六字の叫びであります。六字は円満完全不可思議な力であります。完成された名のりを聞き、絶対の勅命にふれた者は「……していればいいのですか」なんて灰色なことを言っではいられないのです。だからこそ、聞いたままが信となるのです。
- なんだか広い気になりました。できあがったみ仏の名のりを聞くのであります。
- △ み仏の救いは無条件であります。招喚の勅命は一切衆生の魂のどん底につねにとどいてくださるのです。ただ、心の眼と心の耳が開かないのです。それが他力自然のおはからいによって開けてきて、はじめてみ仏の勅命がわがものとなるのです。み仏はあなたをそのまま救います。
- いつですか。
- △ 聞いて信の世界が開けた時です。
- ありがとうございます。南無阿弥陀仏。

- 先生、み仏様は罪悪にかたまつたこの機をお助けくださるのですか。後生たすけたまえとたのんだ機をお助けくださるのでしようか。
- △ それはおもしろいお問いです。あなたはどちらだと思えますか。
- 先日も同行と議論しましたが、どうもよくわかりませぬ。罪悪のままではもちろんだめでしょうし、しかしたのむ機をお助けくださるのでしたら、私の方になにかないけねばいけない気がします。
- △ なるほど。しかしみ仏のお慈悲がとどけばそんな疑いはなくなります。いったい大悲の本願は何のためにたてられたのですか。
- それは助からぬ地獄一定のこの機のためです。
- △ そうです。しからば罪にかたまるこの機を助けたいの本願でしょう。
- では、み仏様は罪悪にかたまつたこの機をお助けくださるのですか。
- △ そうです。けれども、たのむこの機、すなわち信心決定の、「いわゆる信法はついています。「煩惱のこの身をこのままながら助けたまう願力ぞと信じたのむ」そこには、善導大師の二種深信は二種一具となつて出ています。
- では、たのむこの機をお助けと考えてもいいのですか。
- △ それではちがいます。たのんだ機をお助けということになれば、信仰をたのみにするので弥陀をたのみにするのではなくなります。
- ではいただいた信心をも杖にするのではないのですか。
- △ そうです。得た信仰に用事なく、いただいた信心に手がはなれるのです。
- それではおちます。
- △ おちるところに弥陀があります。おちるあなたをおとさぬのは弥陀のお仕事です。
- ではたのむこの機は用事はないのですか。
- △ 能信の功をたのむのは自力です。だめです。信じた心をお助けという信仰なれば、それは領解だのみです。信じながら信じた心に用事がなく、領解しながら領解心に用事がなく、歓喜しながら歓喜心に用事がなく、安心しながら安心心に用事がなく、称えながら称えた念仏に用事がなく……まったく弥陀のみ心とわが心がとけあつて、後生の一大事に手がはなれたのが、他力の安心です。
- ありがとうございます。よくわかりました。